

陳述書

2017年12月1日

佐賀地方裁判所御中

住所 福岡県糸島市
氏名 亀山ののこ

(1)

私は写真家をしています。東京で生まれ育ち、33歳まで東京を離れたことがありませんでした。

写真とは18歳で出会い、自分が生きている意味を実感しました。大学卒業後、プロカメラマンとしてキャリアをスタートさせ、20代は雑誌や広告などの仕事に無我夢中で邁進していました。31歳で結婚をし、33歳、双子の息子を授かりました。

私の実家は東京の東大和市という自然豊かな場所にあり、家の周りは雑木林に囲まれていました。双子が生後4ヶ月の時、これからは私の父や兄家族の側で、自然の中で息子たちを育てていこうと、故郷の家に移り住むことにしました。母はすでに亡くなっており、一人暮らしだった父が孫たちの世話を手伝ってくれました。そしてその2ヶ月後に3.11が起きました。

(2)

私はそれまで原発というものに無関心に生きてきました。原発の原料となるウランが採掘される時も、運搬する時も、発電所で作業がなされる時も、どこかの土地やそこで働く誰かが被曝しているということを知りませんでした。捨て場のない核のゴミが増え続けていることも知りませんでした。

双子たちにおっぱいを飲ませながら、ノートパソコンを膝に乗せ、懸命に調べました。チェルノブイル事故の時、1600キロ離れたドイツでも放射能汚染が問題となったと知り、約200キロの東京は危ないんじゃないかと考えるようになりました。ガイガーカウンターを買って、庭の雨どいの下を計測しました。0.4マイクロシーベルトを検知しました。東京の水道水からも放射性物質が検出されました。

それでも政府や報道、テレビは、影響ない、食べて応援、絆と言いつけました。私は、政府のことも報道も鵜呑みにしてはいけけないのだと、人生で初めて痛烈に感じました。

自宅窓から見える、私が育ってきた森、子どもたちもここを自由に駆け回って育つだろうと思っていた森。

その森にも等しく放射性物質は降り注いだのだと思うと、見た目はそのままに美しい森がまるで違って見えました。取り返しのつかない汚してしまったものの大きさ、一人ひとりの大人の責任の重さを遅ればせながらやっと感じたのです。

(3)

原発事故から1ヶ月、双子の赤ん坊を抱え、仕事にも復帰をし、ただこの原発の問題に向き合うと決心をしました。当時、放射能を心配する母親たちのことを、神経質だとか、放射能ノイローゼだとか、証拠を示せだとか、様々な批判の言葉が飛び交いました。

自分の子どもを守るという生き物としての本能を否定される社会は恐ろしいと思いました。

どんな状況にあっても、子どもを守りたい。それが母親たちの共通の願いです。そしてそのためには、もう原発はいらない、これ以上核の汚染を繰り返してはいけけない。このシンプルな道こそ、私たち一人ひとりが声を上げていかねばならぬものだと思いました。

そして私はその思いに共感してくれる母たちを募り、母子の写真を撮り始めました。2011年、4月のことです。ブログで思いを綴ると会ったこともないたくさんのお母さんからメッセージが来しました。どう声をあげていいかわからなかったという、普通のお母さんたちです。一人ひとり会いに行き行って撮影をし、この声の一部のものではないと知らせるために、100人は絶対に撮ろうと決心しました。

そして2012年、原発はもういらないと声をあげた母たちの写真集「100人の母たち」を出版しました。

新聞、雑誌、テレビ、多くのメディアに取り上げられ、全国の有志の方たちによって、100カ所以上で写真展が行われました。お隣の国韓国でもソウル市庁のロビーを始め、50会場で開催されました。

それはひとえに、もうこの世界のどこでも原発の事故を起こしてはならないという、どこまでもまっとうな願いによるものです。

(4)

2011年8月、私たちは家族会議を重ね、東京から福岡へ移住することにしました。安心して食べ物を買える。窓を思いっきり開けられる。海で泳げる。山を歩ける。水道の水を飲める。雨にも濡れられる。洗濯物や布団を思う存分干せる。子どもに泥遊びさせられる。そうした当たり前前に思えた、ただ何より大切な日常の喜びを味わいました。

今暮らす糸島は海に山に川に農作物に恵まれた、本当に愛すべき土地です。この土地は、私たち世代だけのものではありません。これから先の子どもたちにも残していかなければなりません。人間だけでなく、様々な動植物の生態系が織り合わさって生きています。

しかし、糸島市は玄海原発から30キロ地点にあります。

(5)

今年の3月23日、玄海原発の再稼働に向け、糸島で住民説明会が行われました。到底受け入れることの出来ない説明ばかりされていました。その中でも、九州電力取締役山元春義さんは「どうして原発を再稼働しなくてはいけないのか？」という問いに

「2011年に玄海が止まり、厳しい電力需給の中、火力発電も動かした。他電力から買ってお届けするという悔しい思いもした。今後は福島を経験を九州電力としてしっかり捉えて、川内そして玄海原発を復帰させて安定した電気をお届けしたいのでご理解頂きたい」

と述べたのです。福島の事故が起きて、本当に悔しい思いをしたのは誰でしょうか。

今も増え続ける、小児甲状腺癌という病を患ってしまった子どもたちへ思いを馳せることはないのでしょうか。

「原発さえなければ」と遺言を残し自ら命を経った酪農家さんへの一粟の申し訳なさも感じないのでしょうか。

(6)

私たちはまっとうに生きたいのです。

福島の事故で、原発はどんなに安全対策をしたとしても事故は起こってしまうものだというのがはっきりしました。玄海原発で事故が起きれば、偏西風に乗って九州はもちろん四国、中国、近畿、関東、東北、北海道まで放射性物質が飛散し、夥しい数の市民が被曝します。そして世界中の海や土地も汚染します。

福島原発の2号機では今も650シーベルトという数十秒で人が死に、ロボットさえも数時間ももたないような前代未聞の状況が続いているのです。汚染物の入ったフレコンバックは増え続けています。原発の事故は分断や貧困、いじめを引き起こします。いつでも何の罪のない子どもたちが被害者となります。

どうか私たちの道徳心を歪ませないでください。子どもたちに、間違っただ道は正せるんだよという、当たり前のことを教えさせてください。

(7)

糸島で暮らして4年。3.11のとき生後6ヶ月だった双子の息子は今、小学一年生になり、地域の人に見守られながら学校生活を満喫しています。放課後には海、川、山で駆け回って遊んでいます。糸島で生まれた3番目の息子も健やかに育っています。

私の願いは、この日常を守りたいということ。ただ安心して暮らしたい、その憲法でも認められている権利がこのままずっとこの土地で守られていくことです。そしてそれを守る国であってほしい。

皆んなが考えを新たに、安心して信頼しあえる未来を築いていくために、玄海原発の再稼働をどうか許さないでください。

今日はお話を聞いてくださりありがとうございました。感謝致します。